P6「続縄文文化」
P7「オホーツク文化」

続縄文文化　今から２千３百年前、大陸から日本に稲作と金属器が伝わり、弥生文化が始まる。本州とは違って気象条件の厳しい北海道には、鉄器などの金属器は流入したが、米作りは伝わらず、縄文時代からの伝統的な社会・文化が６世紀ころまで続いた。これを続縄文文化と呼んでいる。

写真Ⅰ－５：余市町・フゴッペ洞窟の刻画

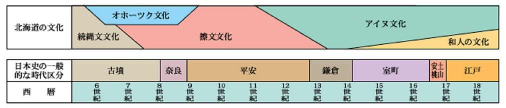
　この時期の後半には、北海道の土器が東北地方や新潟県まで拡がり、さらに、サハリン南部の文化も北海道の中央部まで南下している。この時期は気候の寒冷期に相当するので、それが、各地の文化の移動に影響を与えたものと考えられている。

写真Ⅰ－６：函館市・恵山貝塚出土の土器

写真Ⅰ－７：江別市・坊主山遺跡出土の土器

写真Ⅰ－８：釧路市・興津遺跡出土の土器

表Ⅰ－１：日本列島の歩み



　余市町のフゴッペ洞窟は、1950年に、海水浴に来ていた札幌の中学生と高校生の兄弟が発見した。洞窟の岩面に絵が刻まれているが、このような遺跡は、小樽市の手宮洞窟とフゴッペ洞窟の二つしかない。サハリンやロシアの極東地域に同じような遺跡があるので、北からの影響が強いことがわかる。なお、手宮洞窟の絵は19世紀に発見され、長い間文字ではないかといわれてきたが、フゴッペ洞窟の発見と研究の結果、現在では絵だと考えられている。

6

オホーツク文化　５～６世紀ころ、サハリンから道北地方の海岸部に、漁労や海獣の狩猟をし、犬や豚の飼育も行う人びとが移住してきた。彼らは、７世紀から９世紀にかけて道東のオホーツク海岸から千島列島にまで住むようになり、オホーツク式土器と呼ばれる独特な土器を作った。この文化をオホーツク文化と呼ぶ。

　オホーツク文化の人たちは、海岸近くに集落をつくり、大型の六角形もしくは五角形の竪穴住居に住んでいた。住居の奥には、クマの頭などの獣の骨が積み上げられており、牙や骨でクマを表した彫刻を作った。オホーツク文化に見られるクマに対する信仰は、後のアイヌ文化とのかかわりがあるのではないかと考えられている。また、大陸系の金属器である青銅器が発見されることから、オホーツク文化が、大陸のアムール川中・下流域やロシアの沿海地方に発達した文化とかかわりが深いことがわかっている。オホーツク文化は、北海道では擦文文化と同化して、9世紀ごろには終末を迎えた。

写真Ⅰ－９：湧別町・川西遺跡出土の牙製クマ像

写真Ⅰ－10：網走市・モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器

写真Ⅰ－11：青銅製の帯飾り
北東アジアで作られた金属器

写真Ⅰ－12：擦文文化の住居跡（旭川市・錦町５遺跡）

写真Ⅰ－13：オホーツク文化の住居跡（北見市・常呂川河口遺跡15号）

　オホーツク文化の研究は、1913年に、米村喜男衛が網走市のモヨロ貝塚を発見したことに始まる。ほとんど独学で考古学を学んだ米村は、床屋をしながら発掘と調査を続け、のちに網走市立郷土博物館の館長となった。第二次世界大戦後、モヨロ貝塚と静岡県の登呂遺跡の発掘が行われ、「東のモヨロ、西の登呂」といわれて大きな成果をあげた。

7

P8「擦文文化」
P9「古代のエミシから中世のエゾへ」

擦文文化と交易
　石狩川の上流に位置し旭川市を中心とする上川盆地では、擦文時代にだけ、石狩川沿いに集落が集中するという状況が見られる。サケをとって干し、乾鮭を作って交易をしていたのではないかと考えられている。中世になると、乾鮭は北海道の主要な交易品となった。乾鮭が塩鮭（塩引き）になるのは、江戸時代になってからのことで、北前船によって大量の塩の輸送が可能になったからである。

土師器・須恵器
　土師器とは、古墳時代から奈良・平安時代まで生産された素焼きの土器である。弥生式土器の延長であり、埴輪も土師器である。全体的に赤みがかった色をしている。
　須恵器は、５世紀に朝鮮半島南部から伝った土器で、古墳時代から平安時代まで生産された。土師器より高い温度で焼かれるので、青みがかった灰色で硬い。土師器より高級な品とされた。

擦文文化　７世紀ころ、北海道の人たちは、東北地方の**土師器**から影響を受けて、土器に縄文をつけなくなり、木片で表面を整えるようになった。このような土器を擦文土器とよび、擦文土器を用いる人たちの文化を擦文文化と呼んでいる。この時代の生活は、サケ・マスなどの漁労、シカなどの狩猟、野生植物の採集、アワ・キビ・オオムギなどの畑作農耕が行われた。また鉄器が多く用いられるようになり、本州で生産された**須恵器**も使われた。

写真Ⅰ－14：奥尻町・青苗遺跡出土の擦文土器
擦文時代後期の土器である。右手前はフイゴの羽口。

　擦文時代の人びとは、サケ・マスがとれる河川の流域や海岸に集落を形成した。住居は、かまどの付いた四角形の竪穴住居で、東北地方の影響が強い。簡単な機織技術が普及し、布製の衣服が着用されたことも大きな特色である。

　擦文土器は、東北地方の北部でも発見されている。そして、日本海沿岸の交易の発達によって、鉄鍋や漆器などが入ってくるようになると、擦文文化の人たちは土器作りをしなくなった。擦文文化は、12世紀末～13世紀ころに終わったと考えられているが、これが日本列島における土器文化の終わりとなったのである。なお、擦文文化人はアイヌ民族の祖先と考えられている。

　８～９世紀ころ、石狩低地帯の江別や恵庭に、東北地方の北部の終末期の古墳に似た円墳が築かれている。これは**北海道式古墳**といい、この古墳を残した人たちは、東北の人たちとの交流が深かったと思われる。

写真Ⅰ－15：復元された江別古墳群（江別市・後藤遺跡）

8

古代のエミシから中世のエゾへ　古代の記録には、エミシ（蝦夷）とよばれる集団が登場する。『日本書紀』によれば、阿倍比羅夫の遠征（658～660年）には、津軽・渟代（能代）・齶田（秋田）などのエミシとともに、渡嶋エミシが出てくる。この渡嶋は、北海道とみられるが、東北地方の一部とする意見もあり、結論が出ていない。また、659年の記事によると、遣唐使の一人が唐の皇帝の問いに答えて、「エミシには遠くの都加留、次の麁蝦夷、近くの熟蝦夷の三種類があり、熟蝦夷は中央の朝廷に対し貢物を差し出し服従している。」と述べている。

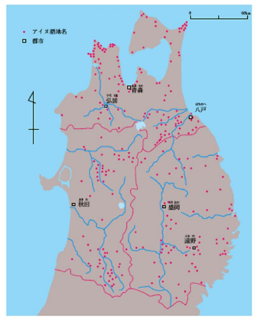
　エミシは、アイヌの人たちなど特定の集団をさすのではなく、朝廷に従わない者をさすのが一般的である。その一方で、東北地方の北部にはアイヌ語の地名がある。このことから、エミシの中にアイヌ民族の祖先が含まれていたことは、間違いないと考えられるようになっている。

　７世紀ころの大和朝廷の勢力範囲は、今の宮城県の南端から新潟県中部までだったが、８世紀になると、朝廷の勢力は秋田県から宮城県にまで広がった。８世紀末に、エミシの中から任命されていた役人である伊治呰麻呂が朝廷に戦いを起こした。さらに、アテルイの率いるエミシの軍が、朝廷の派遣した大軍を破った。だが、その後アテルイは、朝廷から征夷大将軍に任命された坂上田村麻呂に敗れた。

　10世紀になると、エミシの蜂起はなくなる。これは、中央の権力が東北に及ぶようになったことを示すものと考えられる。平安時代の後期には、陸奥・出羽地方は豪族の**安倍氏**と**清原氏**の勢力下に置かれた。その後、東北地方は平泉を中心とする**奥州藤原氏**が支配するようになった。

　12世紀の後半になると、エミシに代わって、エゾ（蝦夷）と呼ばれるようになる。この呼び名の変化が、擦文文化の終わりと関係があるかどうかはわかっていない。

安倍氏・清原氏・奥州藤原氏
　安倍氏は平安時代の陸奥の国に勢力を持った豪族である。安倍氏は、朝廷から俘囚の長に任命されていた。俘囚とは、エミシの中で朝廷の支配に服するようになった人たちのことである。
　俘囚のなかには、大きな勢力を持つものも現われるようになった。安倍氏のほかに、清原氏や奥州藤原氏などがいる。藤原氏の繁栄ぶりは、平泉の中尊寺金色堂で知られている。なお、奥州藤原氏は、都の藤原氏からも一族と見なされていたが、その一方で俘囚の指導者であると称していた。このように、安倍氏・清原氏・奥州藤原氏とアイヌ民族との関係は、まだはっきりしないことが多い。



図Ⅰ－３：青森県・秋田県・岩手県にあるアイヌ語地名

9